



人の世に熱あれ 人間に光りあれ!!

発行人 牧坂秀敏・小宮 豊

人権相談員便り [結い]

あなたの人権は保障されていますか？ 一人で悩まずにお気軽にご相談ください。

「認知症になっても、本人の意思が尊重され、住み慣れた地域で暮らし続けられる社会を目指す」とは!?

「京都式オレンジプラン」に学ぶ!!



◆認知症の人たちを真ん中に据えて……

先般、認知症の「ケアと予防」に関する国際会議が日本で開催されました。世界で急増する認知症の人たちが4400万人ともいわれ、各国共通のテーマになってきています。

日本においても、「認知症の人が住み慣れた地域で一緒に生き生きと暮らせる社会をつくろう」とさまざまな取り組みが行われています。ところが、実際には、居場所がなく、徘徊するなどの理由で精神病院に長期入院させられたり、行方不明者になってしまったり、鉄道事故などでいのちを失ったりして、社会問題になっています。

つまり、認知症の当事者とその家族にとっては、筆舌に尽くし難く、さまざまな苦難の連続で、決して生き生きと暮らせる社会ではないのです。障害や疾病などでさまざまな困難を抱えている人たちが社会のなかで、生き生きと安心して暮らすためには、当事者が求めていることを中心に据えていく。つまり、当事者を真ん中に、生き難く暮らしづらい当事者やその家族を取り巻く環境（ハードとソフト）自体を変えていくことが求められています。これまでも、幾度となく「結い」で認知症の問題を取り上げ、当事者の声に向き合うことの重要性を強調してきました。

今回紹介するのは、「認知症になっても、本人の意思が尊重され、住み慣れた地域で暮らし続けられる社会を目指す」として、認知症の当事者の聞き取りを通して、本人が何を求めているのかなど

をきちんと把握することを起点にした京都の取り組みについて紹介します。

国は2012年9月に、認知症発症初期から本人や家族を支援し、切れ目なく必要な医療・介護サービスを提供できる体制整備を目指して「認知症施策推進5カ年計画」（オレンジプラン）を発表しました（「結い」28号参照）。これを受けて、京都府では、医療・介護・福祉・認知症の当事者団体等31団体から構成されるプロジェクトで1年をかけて議論を重ね、翌年9月、「京都式オレンジプラン」を策定しました。その特徴は以下の通り。

京都式オレンジプランの特徴

- 1 全国に先駆けて、京都府の地域実情に即したプランとして策定
- 2 京都府、市町村だけでなく、あらゆる関係団体や京都府民が行動すべき取組を明示
- 3 予防・初期～ターミナル期までの広範・多岐にわたる認知症の課題全体を網羅
- 4 達成目標として認知症当事者からの「10のアイメッセージ」（次頁に掲載）を導入

◆アイメッセージの意味

なかでも、認知症当事者からの「10のアイ（「私の意味）メッセージ」は、二つの意味で画期的です。ひとつは、医療・介護・福祉のすべての団体の総意としてまとめられたこと、ふたつには、京都の認知症施策を認知症の当事者や家族も参加して評価し、それを達成度の指標とすること」を京都府が宣言したことです（プロジェクト委員・府立洛南病院森俊夫副院長の話）。

いわば、「認知症になっても本人の意思が尊重され、住み慣れた地域で暮らし続ける社会を目指す」

という取り組みとその目標の達成度を認知症の当事者が評価するという事です。

これまでは、認知症といえば、どのようなケアを提供するのか、支援する側の問題に焦点が当てられがちでしたが、まさに当事者の声に耳を傾けることを通して、名実ともに認知症の人を真ん中にして、医療・介護そして社会システムの在り方、まちの風景が変わろうとしています。

いままでにない特徴としては、行政主導ではなく、医療・介護・福祉の各団体、大学、弁護士会などの関係団体が主導して議論を重ねて策定したことです。その母体は、「京都地域包括ケアシステム推進機構」(2013年6月設立)です。「京都式地域包括ケアシステム」を実現するために、行政

も含めてあらゆる関係機関が結集して「オール京都体制」で設立したといえます。

国の施策にはない独自の取り組みでは、早期の気づき・発見では、「認知症の人とその家族を支えるためのケアマネジャー育成事業の創設」(目標120人)、相談窓口の充実では「認知症介護経験者による相談対応や介護サービス事業所による相談窓口の設置」(目標、概ね中学校区域で実施)などがあります。「京都式オレンジプランに続け」とばかりに、全国で新たな取り組みが広がっていくことを期待します。

翻って、人権施策においても、まさに被差別当事者を真ん中にした人権施策の見直しとその充実が求められているとあって過言ではありません。

京都式オレンジプラン 達成目標としての「10のアイメッセージ」

- ① 私は、周囲のすべての人が、認知症について正しく理解してくれているので、人権や個性に十分な配慮がなされ、できることは見守られ、できないことは支えられて、活動的にすごしている。**
※認知症になっても、できることがたくさんあり、できないことには、どんな支援が必要なのかなど、すべての人がこの病気を正しく理解することで、認知症の人の人権と個性が尊重される社会になります。
- ② 私は、症状が軽いうちに診断を受け、この病気を理解し、適切な支援を受けて、将来について考え決めることができ、心安らかにすごしている。**
※早い時期に正しい診断や治療を受け、病気を理解し、支援を受けることで、認知症の人が自分自身の将来を考え決めることができる社会になります。
- ③ 私は、体調を崩した時にはすぐに治療を受けることができ、具合の悪い時を除いて住み慣れた場所で終始切れ目のない医療と介護を受けて、すこやかにすごしている。**
※認知症の状態や家族の状況等に応じ、適切に医療や介護・福祉のサービスが連携し提供されることで、認知症の人が住み慣れた地域で必要な時に必要な支援が受けられる社会になります。
- ④ 私は、地域の一員として社会参加し、能力の範囲で社会に貢献し、生きがいをもってすごしている。**
※認知症についての偏見をなくすことで、地域の中で孤立せず、できる範囲で働きたい、何か役割を果たしたいという認知症の人の思いが、かなえられる社会になります。
- ⑤ 私は、趣味やレクリエーションなどしたいことをかなえられ、人生を楽しんですごしている。**
※これまで培ってきた仕事や趣味の能力を、可能な限り活かせる場や機会が身近な地域に多くできることで、認知症の人が自分らしく人生を楽しめる社会になります。
- ⑥ 私は、私を支えてくれている家族の生活と人生にも十分な配慮がされているので、気兼ねせずすごしている。**
※認知症の人を支える家族の介護負担を軽減するため、身近なところに、相談や交流の場を増やすことで、介護者の生活や健康にも十分な支援が届く社会になります。
- ⑦ 私は、自らの思いを言葉でうまく言い表せない場合があることを理解され、人生の終末に至るまで意思や好みを尊重されてすごしている。**
※意思表示がうまくできなくても、あたりまえに地域で暮らせることで、人生の終末を迎えても、認知症の人の尊厳が大切にされる社会になります。
- ⑧ 私は、京都のどの地域に住んでいても、適切な情報が得られ、身近になんでも相談できる人がいて、安心できる居場所をもってすごしている。**
※京都のどの地域に住んでいても、認知症に関する情報を得ることができ、身近なところで、各種のサービスを利用したり、仲間と出会い・交流ができることで、認知症支援に格差のない社会になります。
- ⑨ 私は、若年性の認知症であっても、私に合ったサービスがあるので、意欲をもって参加し、すごしている。**
※若年性の認知症になっても、同世代の人と同じように、家族や地域での役割が果たせることで、若年性認知症の人も生きがいもてる社会になります。
- ⑩ 私は、私や家族の願いである認知症を治す様々な研究がされているので、期待をもってすごしている。**
※究極の願いは認知症が治ること。そのために、認知症の原因解明、薬やケアなどの研究に社会全体で取り組むことが必要です。